

Aesthetic Group Gymnasticsの概要とコーチングシステム

— IFAGG及びフィンランド体操協会の資料から —

The Aesthetic Group Gymnastics Overview and Coaching System

— From Materials of IFAGG and Finnish Gymnastics Association —

次世代教育学部こども発達学科

川瀬 雅

KAWASE, Miyabi

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

要旨：本資料の目的は、フィンランドやエストニアなどのヨーロッパ諸国で100年以上にわたって取り組まれているスポーツであるAesthetic Group Gymnastics (AGG) について、2020年8月時点で確認できる基本的な情報をここに集約することである。また、AGGに取り組んでいるなかでも特に成功を収めている国としてフィンランドを取り上げ、フィンランド体操協会の資料からその成功の要因を明らかにする。結果として、フィンランドにおけるAGGの取り組みは、(1) 年齢や目的に合わせた多様なプログラムの提供、(2) インストラクターの養成の2つによって成り立っており、多様性を尊重するリーグ選択制とそれを支えるコーチングシステムによってAGGにおいて成功を収めていることが明らかになった。

キーワード：Aesthetic Group Gymnastics, フィンランド, 体操, 生涯スポーツ

1. はじめに

Aesthetic Group Gymnastics (以下よりAGGと示す) とは、フィンランドやエストニアなどのヨーロッパ諸国で100年以上にわたって取り組まれているスポーツである。まずは今日までに行われてきたAGGの研究について確認したい。筆者が資料収集のためにCiNiiとGoogle Scholarを使用して「Aesthetic Group Gymnastics」と「AGG」の語で検索を行ったが、該当結果は2020年8月26日時点においてCiNiiでは0件、Google Scholarでは1件だった。その1件は、Gateva, M. (2014) が新体操選手とAGGの選手のトレーニング負荷が及ぼす影響について調査したものであった。その他、論文中にAGGについて触れたものはいくつかあったものの、AGGそのものを研究の題材とする論文は確認できなかった。

日本国内におけるAGGに関する報告は滝沢かほる (2000) の日本体育学会での口頭発表が確認できた。また滝沢は、新大広報 (2000) において、「第1回芸術的グループ体操世界選手権大会について」と

いうコラムを寄せており、主催国フィンランド体操連盟からの推薦を受け、日本で唯一の参加グループとして新潟体操クラブの10名が大会に出場し、24位という成績を修めたことを報告している。滝沢 (1989) は「フィンランド女子体操の流れ」にてフィンランド女子体操の成り立ちと特徴について述べており、その特徴がAGGと類似する箇所があることからルーツを探ることができる。その後に発行されたもので確認できるAGGに関する資料は、2006年に開催された「International SUN SVOLI Gymnastics Festival (フィンランド体操祭)」の視察報告 (川端, 2007) と筆者が所有する国内のAGGの大会パンフレットとルールブック及びIFAGG (International Federation of Aesthetic Group Gymnastics: 国際AGG連盟) のホームページで閲覧できる情報のみである。

上記してきたように、現時点ではAGGに関する情報を得ることが難しい。そのため、本稿では2020年9月現在におけるAGGに関する情報を整理すること、また、AGGへの取り組みが盛んであるフィンランドの取り組みを明らかにすることを目的とする。上記に

ついて示すことで今後AGGについて研究を進めるうえでの一助となるように努めたい。

2. Aesthetic Group Gymnasticsの概要

競技名のとおり、美的であることを追求する団体体操である。美しい体操といえば、体操競技（Artistic Gymnastics）や新体操（Rhythmic Gymnastics）が一般には認知されているが、AGGはそのどちらとも異なる。体操競技は技術を極める体操であり、新体操は手具と身体の動きと音楽が調和している体操である。この2つの体操は結果的に芸術性や美が現れたり、また意図的に現れたりするが、AGGはその名前にもあるように「Aesthetic（美的）」な価値を創造することを目的とした芸術的なスポーツである。女子新体操にも団体競技があるが、AGGはこれとは異なり、手具を持たずに徒手で行う。日本国内においては男子新体操が女子新体操のルールとは異なるそれを用いて独自に発展しているが、徒手で行うという点から男子新体操の団体競技に近いものがある。

AGGは日本を含むアジア圏ではまだ広がりを見せている途中ではあるが、IFAGGによれば、フィンランドやエストニアなどのヨーロッパ諸国は、このスポーツを100年以上にわたって取り組んでおり、1950年代から競争を続けている。最初の国際大会は1996年にフィンランドのヘルシンキで開催され、2000年6月には同じくヘルシンキにて最初の世界選手権が開催された。その17年後の2017年は再びフィンランドのヘルシンキにて世界選手権が開催された。2003年10月12日にIFAGGが設立されて以来、15か国¹がこれらの世界選手権に参加している（IFAGG, 2020）。次から、AGGのルールと特徴について述べていく。

（1）全身を使った流れるような動き

AGGで行われる運動は洗練された自然な全身運動で成り立っており、調和のとれたリズミカルでダイナミックな動きが自然に力を発揮するように行われることが特徴である。これらの動きは、それぞれの新しい動きがその前に行った動きから創造されるように、ひとつの動きから次の動きへと自然に流れるように行われる。すべての動きは流れるように、また、速さと迫力の多様性と大きさをみせなくてはならないとされている（IFAGG, 2020）。

AGGの動きの特徴は、上でも述べたように「流れる動き」による「動きの連続性」にある。一つの動き

から派生して自然に動きが繋がっていくように振付を構成しなくてはならず、動きの繋がりが論理的であることが求められる。1つの動きから次の動きへと発展させることは、滝沢（1989）が報告するヒルマ・ヤルカネン（Hilma Jalkanen, 1889-1964）の体操の特徴「動きはからだの中心から生じ末梢に伝わるが、その時筋感覚が全体的な動きの開発に関係する」から通じているといえるだろう。またこの「流れる動き」及び「動きの連続性」は単に動きの原則となっているだけでなく、同時に動きの優雅さを現出させている。

（2）難度の多様性

演技の構成には、全身の波動とスイング、バランスとピボット、ジャンプとリープ、ダンスのステップ、リフトなど、多様な身体の動きが含まれている必要があり、柔軟性、スピード、強さ、調整力、容易にこなせる能力などの身体的な能力が求められる（IFAGG, 2020）。AGGが新体操や体操競技と大きく異なるのは、その動きの多様さにあるといえる。新体操、体操競技、AGGは演技を構成する「身体の難度」があることは共通しているが、新体操と体操競技においては、バランス、ターン、ジャンプにそれぞれ基準があり、脚の高さ、回転数、開脚度など難度が成立する条件が細かく定められている。難度の価値は0.1点刻みで決まっており、高得点を得るためにはより難度の高い技を行うことが求められる。しかしAGGの難度は基本的にA（0.1点）かB（0.2点）の2種類のみであり、基準を満たせば難度として行う身体の形は自由に創造することができ、難度に多様性がある。この難度の多様性によって、選手やチームの実態に応じて演技を構成することができるといえるだろう。

（3）芸術的な価値

AGGはその競技名のとおり、6名から10名の選手でグループが構成され、チームワークと団結が本質にあるといえる。単に団体で徒手体操を行うのではなく、振付けによって、音楽の表現を解釈するように動きで物語が表現される。

つまり、芸術のように物語を表現することがこのスポーツの目的であり、そこには様々な美的価値が現れる。IFAGGによれば、「AGGは、芸術、表現、感情を組み合わせた、ハイレベルな競技スポーツである（IFAGG, 2020）」といわれている。

(4) 年齢カテゴリーと主要大会

年齢は下記のように5つのカテゴリーに分けられている。

- ① Senior category：16歳以上の選手
- ② Junior category：14歳から16歳までの選手
- ③ Children category12-14：12歳から14歳までの選手
- ④ Children category10-12：10歳から12歳までの選手
- ⑤ Children category8-10：8歳から10歳までの選手

カテゴリーによってルールが異なるため、日本国内における体操や新体操のように小学生が高校生や大学生と同じ基準で演技を構成するということはない。年齢が高くなるにつれて質を評価していく傾向にある。

また、大会もAからCカテゴリーに分かれている。主要な大会はAカテゴリーに属する国際大会で、例えばWorld ChampionshipsやWorld Cup competitionsなどで、年齢カテゴリーのうち①16歳以上のシニアカテゴリーと②14歳から16歳のジュニアカテゴリーが参加できる。③と④の年齢カテゴリーは、Bカテゴリーの大会またはCカテゴリーの大会に出場する。一部の大会では、⑤8歳から10歳のカテゴリーのチームが参加できる。また、大会によっては8歳以下のカテゴリーが設けられていることがある。このように出場カテゴリーを年齢ごとに細分化することで、無理なく適切に体操を楽しむことができると考えられる。

3. フィンランドにおけるAGGの取り組み

ここまでは今日におけるAGGに関する研究や報告書、AGGそのものについて述べてきた。ここから先は、AGGにおいて先駆的かつ開明的な国のひとつであるフィンランドを取り上げて、その取り組みを示す。IFAGGによれば、フィンランドのAGGの取り組みは、Finnish Gymnastics Federation (SUOMEN VOIMISTELULIITTO：フィンランド体操協会)に従っている。そのため、まずはフィンランド体操協会の取り組みから確認していく。

(1) フィンランド体操協会の概要

フィンランド体操協会は、1896年にフィンランドで最初のスポーツ中央組織であるフィンランド女子体操協会 (Suomen Naisten Voimisteluliitto) にルーツを持つ全国的な組織で、1900年にフィンランドスポーツ連盟SVUL (Suomalainen Voimistelu- ja Urheiluliitto SVUL) として設立され、100年以上の歴史のなかで現在のフィンランド体操協会に統合された。

1989年、フィンランド体操協会の会員数は100,000名を超え、2014年には380のクラブと115,000名の会員を抱えるまで成長し、フィンランドにおいて巨大な組織の1つとなった (Mickels, B., 2014)。今日では更に会員数が増大し、協会は374の加盟クラブと130,000名の会員を抱えている。各クラブの会員は、母親、父親、祖父母、その家族と一緒に体操に参加する乳幼児から、ヒップホップや器具や手具などを使用した体操を行う若者、ダンスまたは車いすで行う体操などに参加する高齢者まで様々である (SUOMEN VOIMISTELULIITTO, 2020)。会員の年齢層が幅広いことから、多くの人々が生涯にわたって体操に親しんでおり、それを実現するための多様なプログラムが用意されていると推察できる。

また、上記したような生涯スポーツとしての体操だけではなく、競争的なスポーツとしての体操も親しまれている。フィンランド体操協会では、FIG傘下の全ての競技 (体操競技女子・男子、新体操、エアロビクス、トランポリン、アクロバット競技) と、欧州体操連合 (UEG：European Union of Gymnastics) 傘下のチームジム (Team Gym)、そして国際AGG連盟のAGGが競争的な体操として選択することができる (SUOMEN VOIMISTELULIITTO, 2020)。ここで、日本とフィンランドの体操人口を比較すると、フィンランドの体操人口が130,000人に対して、日本における体操人口は2018年時点で27,638人に留まっている (体操協会, 2018)。また、フィンランドは1989年以降体操人口が増大しているが、日本では年を追うごとに減少傾向にある。国内の人口も考慮して比較すると、フィンランドは体操が広く認知され、多くの人に生涯スポーツとして、或いは競技スポーツとして選択され、親しまれているといえるだろう。

こうした体操人口増大の背景には、フィンランド体操協会の「教育」の役割も大きい。フィンランド体操協会は、単に大会や競技情報のとりまとめを行っているのではなく、教育の役割も大きく担い、様々な教育的プログラムを提供しており、協会に所属する約4000名のコーチ、インストラクター、クラブリーダーが協会主催のプログラムに毎年参加している (SUOMEN VOIMISTELULIITTO, 2020)。また、フィンランドにおいて多くの体操クラブは主にボランティアによって運営されており、大きなクラブのみが従業員を雇用している (Mickels, B., 2014)。ボランティアによる運営や教育プログラムの提供などはフィンランドの社会的な背景が大きな影響をもたらしていると推察できる。

フィンランドにおける体操に関する取り組みをまとめると、(1) 年齢や目的に合わせた多様なプログラムの提供、(2) インストラクターの養成の2つが特徴だといえるだろう。次からは、上記2つの視点でフィンランドにおけるAGGの取り組みをフィンランド体操協会の公式ホームページに掲載されている情報から解説していく。

(2) 年齢や目的に合わせた多様なプログラムの提供

フィンランドにおいてAGG競技に参加する12歳以上の人々は、4つの異なるレベルのリーグで競われる。

- ①Harrastesarjat (Hobby-Series：趣味のシリーズ)
- ②Kilpasarjat (Competition-Series：競技シリーズ)
- ③SM (Suomen Mestaruus)-sarjat (Finland Championship Series：フィンランド選手権シリーズ)
- ④Valmisohjelmasarjat (Pre Program-Series：育成プログラム)

一般的には①から③に所属し、④に参加するのは一部のみである。競技レベルは、①から④になるにつれて向上していく。これらのリーグと年齢カテゴリーを表1. 年齢カテゴリーの区分としてまとめた。

表1 年齢カテゴリーの区分

IFAGG	Children 8-10	Children 10-12	Children 12-14	Junior 14-16	Senior over 16
① Harrastesarjat (Hobby)	8-10	10-12	12-14	14-16	16-20 over 18
② Kilpasarjat (Competition)			12-14	14-16	16-20 over 18
③ SM-sarjat (Finland Championship)			12-14	14-16	over 16
④ Valmisohjelmasarjat (Pre Program)		10-12	12-14		

①趣味のシリーズ (Harrastesarjat) は、8歳から10歳、10歳から12歳、12歳から14歳、14歳から16歳、16歳から20歳までと、18歳以上の年齢カテゴリーがあり、同じシリーズに所属するチームで競われる大会に出場する。8歳から10歳、10歳から12歳が参加する全国規模の公式大会はないが、12歳以上は同じシリーズに所属するチームで競われる大会に参加する。また、各種大会に関連して趣味のシリーズの大会が開催されることがある。特徴的なイベントとして、スターラ (Voimistelun Stara-tapahtumassa：Stara Gymnastics) があり、他のイベントや大会と併せて開催されている。このイベントは、8歳から10歳のカテゴリーは点数によって順位付けされることはないが、10歳から12歳のカテゴリーは得点が発表され、

上位3チームは表彰を受けることができ、①趣味のシリーズ (Harrastesarjat) に所属する子どもたちのパフォーマンスの場として、また、②競技シリーズ (Kilpasarjat) に進む前の子どもたちが競争を学ぶ場として機能している。さらに、参加した全てのチームに審査員から書面でフィードバックが行われる。

②競技シリーズ (Kilpasarjat) の年齢カテゴリーは①趣味のシリーズ (Harrastesarjat) と同様に12歳から14歳、14歳から16歳、16歳から20歳までと、18歳以上の年齢カテゴリーがあり、同じシリーズに所属するチームで競われる大会とそのチャンピオンシップに出場する。

③フィンランド選手権シリーズ (SM-sarjat) は、12歳から14歳、14歳から16歳、16歳以上の年齢カテゴリーで競われ、フィンランド選手権に出場する。

④育成プログラム (Valmisohjelmasarjat：Pre Program-Series) は、10歳から12歳、12歳から14歳の年齢カテゴリーが設けられている。国内および海外の大会で活躍することを目指すチームが対象だが、これに参加するには、フィンランド体操協会が主催するタレント発掘のためのセレクションに参加して合格することが条件になっている。

上記してきたように、フィンランドにおけるAGGの取り組みはフィンランド体操協会の全体の取り組みと同様に、年齢や目的に合わせた多様なプログラムが提供されており、AGGの競技に取り組む者が各々の関心の度合いによって競技レベルを選択することができるようになっている。

(3) インストラクターの養成

この章の冒頭にフィンランド体操協会は教育の役割も担っていることを述べたが、ここからはその内容について具体的に示す。フィンランド体操協会のAGGにおけるコーチング活動は、国際的な成功を生み出すためのコーチングシステムを開発及び維持することを大きな目標としており、その具体的な目標は以下のように示されている。

- ①コーチの技術を磨く。
- ②幅広い体操選手に質の高いコーチング活動を提供する。
- ③AGGをトップスポーツとして発展させる。
- ④すべての年齢層で健康を促進するコーチングを確保する。
- ⑤コーチ及びクラブ間の連携を強化する。

具体的な活動はコーチングキャンプへ参加するこ

とであり、その内容は、コーチング計画のサポート、パフォーマンスに必要なトレーニングの習得、競技ルールの知識向上、コーチ間のネットワークを増やし専門知識を共有する、子どものための健康を増進させるコーチング技術の習得等である。また、フィンランド体操協会の公式サイトにはAGGのコーチング資料が常時公開されており、誰もが容易にアクセスして情報を得ることができる。

4. 結果と考察及び今後の展望

本稿ではフィンランドにおけるAGGの取り組みを確認してきた。その結果、フィンランドにおけるAGGの成功要因は（１）年齢や目的に合わせた多様なプログラムの提供、（２）インストラクターの養成にあるといえる。

3-(1)を参照すると、フィンランドにおいてAGGに取り組む8歳から10歳の子どもたちが参加できるのは①趣味のシリーズ（Harrastesarjat）のみであることから、まずは全ての子どもたちがこのシリーズに所属し、日々の練習やスターラでの体験を通してこの競技の楽しさを体得することから始まると考えられる。その後10歳になったときには、所属するチームや自らの意志によってそのまま①趣味のシリーズ（Harrastesarjat）で活動するか、④育成プログラム（Valmisohjelmasarjat）に参加するかを選択することができる仕組みになっている。12歳まで①趣味のシリーズ（Harrastesarjat）で活動した子どもたちも、その後は②競争シリーズ（Kilpasarjat）や③フィンランド選手権シリーズ（SM-sarjat）で活動することを選択することができる。このように、1つの競技への取り組み方が多様であり、目的に応じて競技レベルを選択できることが明らかになった。

また、競技レベルと年齢カテゴリーを分けてコーチングしていくこともフィンランドにおけるAGGのコーチングシステムの1つの特徴だといえる。指導者は、子どもたちの誰もが国際大会で活躍できるようにトップアスリート育成のための指導を受けることを望んでいるのではないという考えを前提にして、趣味レベルでの取り組みや本格的な国内の大会に出場及び国際大会での活躍を目指す等の多様なニーズに応えるべく、専門的な指導方法を身につけ実践することが求められているといえる。また、フィンランド体操協会はこの社会的な要求を実現するべくコーチングシステムを構築し、機能させている。

上記してきたことから、フィンランドにおけるAGGの成功は、多様性を尊重するリーグ選択制とそれを支えるコーチングシステムにあるといえるだろう。今後は、日本国内におけるAGGのコーチングやその他の美的（芸術的）スポーツにおいてもその方法論を転用することができるよう、3-(3)に示したコーチングシステムの資料を読み解くことによってその内実や指導環境を明らかにすることを課題とした。

【脚注】

- ¹ 2020年8月現在、IFAGG公式サイトにA-membersとして掲載されているのは以下の通りである。
Australia, Belarus, Brazil, Bulgaria, Canada, Cyprus, Czech Republic, Denmark, Estonia, Faroe Islands, Finland, France, Germany, Greece, Hong Kong, Hungary, Italy, Japan, Kazakhstan, Republic of Korea, Malaysia, Mexico, Moldova, New Zealand, Norway, Poland, Russia, Singapore, Spain, Ukraine, USA, Venezuela

【参考資料及び引用文献】

- ・Gateva, M., “*INVESTIGATION OF THE EFFECT OF THE TRAINING LOAD ON THE ATHLETES IN RHYTHMIC AND AESTHETIC GROUP GYMNASTICS DURING THE PREPARATION PERIOD*”, Research in Kinesiology Vol.4, No.1, pp.40-44. (2014)
- ・Mickels, B., “*GYMNASTICS FOR ALL IN FINLAND AND WORLD GYMNAESTRADA 2015*”, Ginástica: movendo pessoas, construindo cidadania VII Fórum Internacional de Ginástica Geral pp71-73. (2014)
- ・川端昭夫, 荒木達雄著「2006フィンランド国際体操祭視察報告—International SUN SVOLI Gymnastics Festival (joy of movement)—」中京大学体育学論叢 48-1, pp43-57. 中京大学 (2007)
- ・滝沢かほる, 板垣了平著「フィンランド女子体操の流れ」日本体育学会大会号第40回, p592. 社団法人日本体育学会 (1989)
- ・滝沢かほる著「第1回芸術的グループ体操世界選手権大会」日本体育学会大会号第51回, p387. 社団法人日本体育学会 (2000)
- ・滝沢かほる著, 「第1回芸術的グループ体操世界選手権大会について」新大広報No137, p19. 新潟大学

(2000)

- ・ 公益財団法人日本体操協会「平成29年登録人口集計表」(2018)
- ・ International Federation of Aesthetic Group Gymnastics official site, <https://ifagg.sportisaitti.com/>
最終閲覧日2020年8月26日
- ・ SUOMEN VOIMISTELULIITTO official site, <https://www.voimistelu.fi/>
最終閲覧日2020年8月26日